

経済・金融 フラッシュ

2010年7-9月期 資金循環統計

個人金融資産は2期連続の減少、企業の金余りが鮮明

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

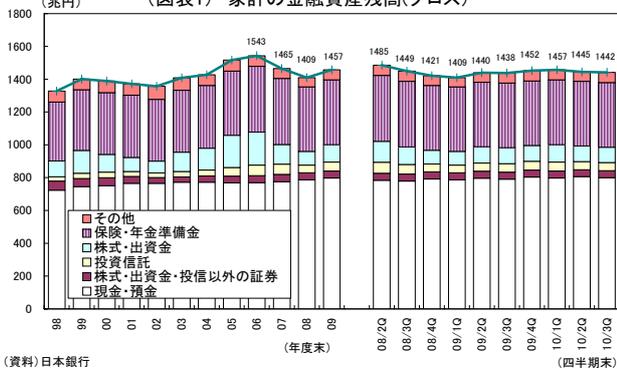
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 個人金融資産残高(2010年7-9月期末): 前年比では4兆円の増加

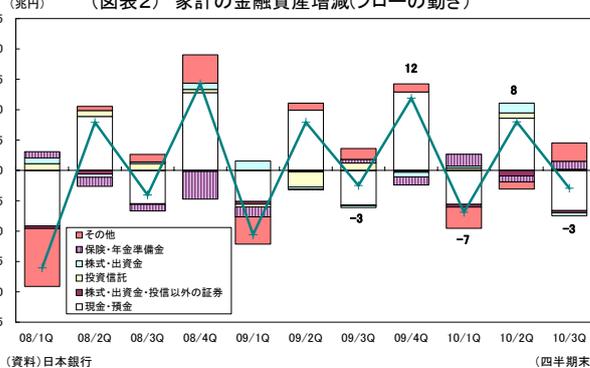
2010年9月末の個人金融資産残高は1442兆円と6月末比▲3兆円の減少と2四半期連続の減少となった(直近ピークは2010年3月の1457兆円)。減少が2期続くのはリーマン・ショック後の2009年1-3月期以来。7-9月期は賞与の最大支給月にあたる6、12月を含まないことから例年フローで流出超過となる傾向がある。今回も3兆円の流出超過となったが、円高・株式市場の低迷などで時価変動の影響も僅かながらマイナスとなり、流出分を補えなかった。

一方、前年比では4兆円の増加となった。一年間で時価変動のマイナス影響が▲6兆円(うち株式・出資金が▲5兆円、投信が▲2兆円)あったが、流入超過10兆円がこれを上回った(図表1~4)。

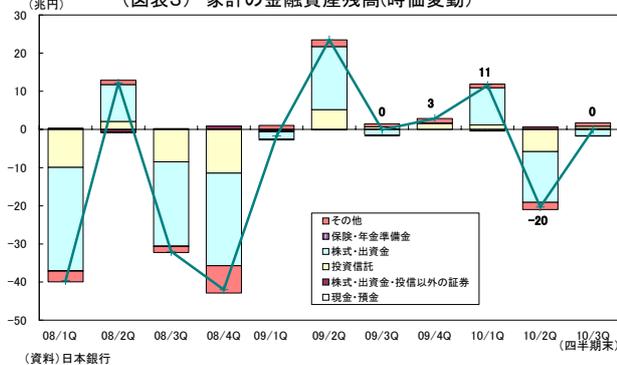
(図表1) 家計の金融資産残高(グロス)



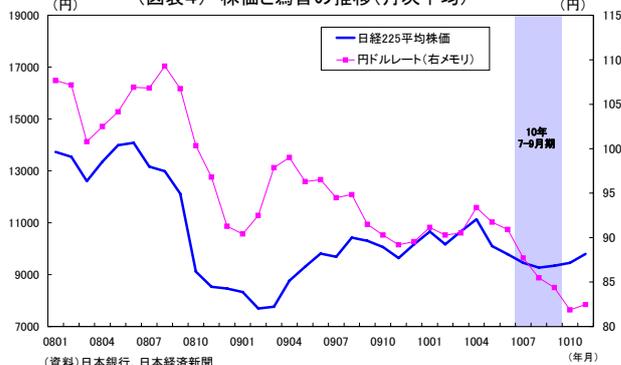
(図表2) 家計の金融資産増減(フローの動き)



(図表3) 家計の金融資産残高(時価変動)



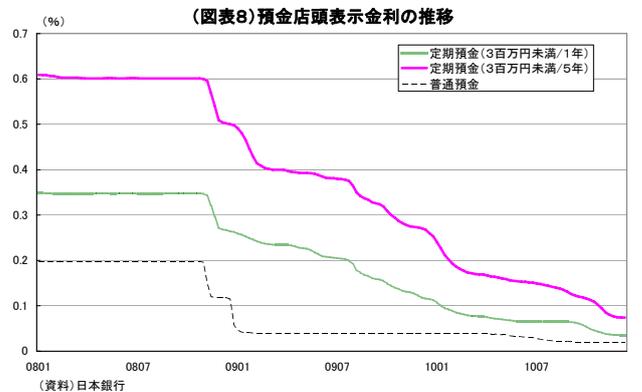
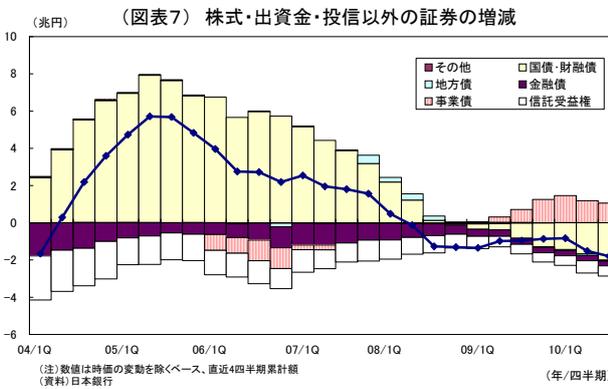
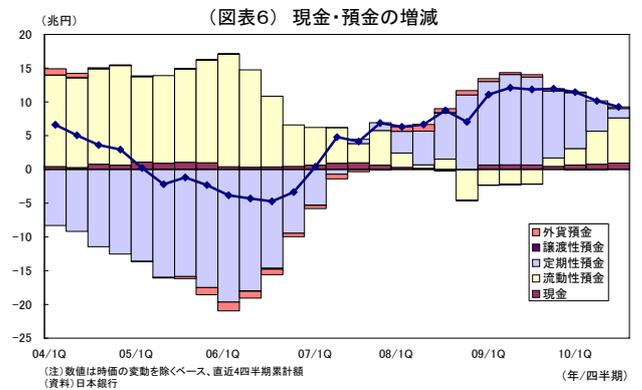
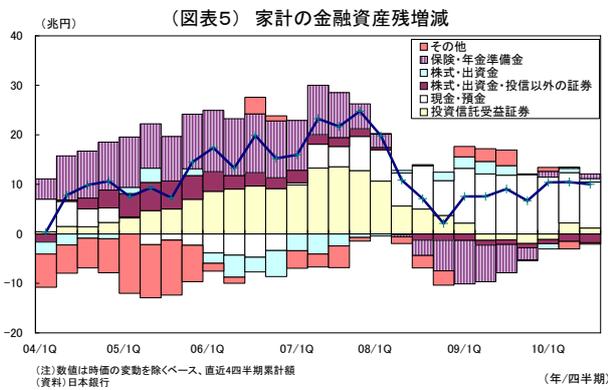
(図表4) 株価と為替の推移(月次平均)



2. フロー(時価変動を除いた流出入額)の基調: 安全性重視、流動性預金への流入が加速

四半期ベースでフローの内訳を見るにあたり、季節要因を除くため、直近4四半期累計というやや長めの基調を捉えた動きをみると、08年以降、株式・出資金等からの資金流出が続くとともに、投資信託への資金流入も大きく減速し、金融資産への流入の大部分を現預金が占めている状況が続いている。引き続き安全性重視の姿勢は揺るいでいない。

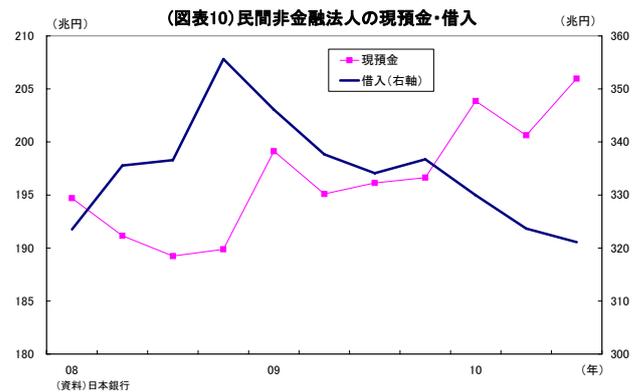
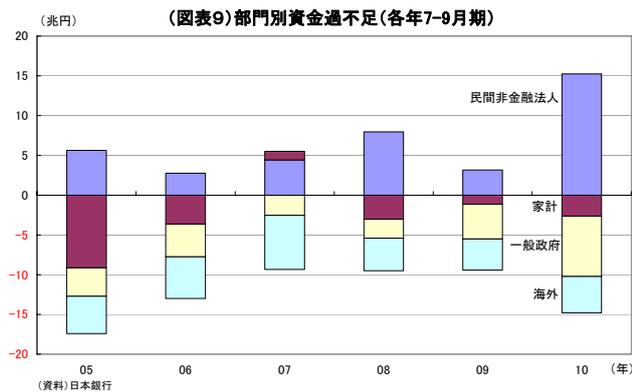
現預金の内訳では、従来定期性預金への流入が大部分であったが、最近では定期性預金への流入が失速し、普通預金など流動性預金への流入が大きく加速している。市場金利の低下に伴って定期預金の金利低下が顕著になっており、普通預金との金利差が大幅に縮小していることが背景にあるようだ(図表5~8)。



3. 部門別資金過不足：企業の資金余剰が鮮明

次に主要部門別の7-9月期資金過不足の状況を確認すると、民間非金融法人の資金余剰が15.2兆円と、前年の3.2兆円から急増している。企業収益が改善している一方で、設備投資には未だ慎重であることを反映したものとみられるが、この企業マネーが一般政府の資金不足(財政赤字)拡大を補った構図になっている(図表9)。

企業の資産・負債に着目しても、借入が減少傾向をたどっている一方、現預金は統計が確認できる97年以降最高の水準にまで積み上がっている。このマネーの今後の行方が注目される(図表10)。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。